新・下野市風土記 28

新しい年・・・新しい都市

下野市教育委員会　生涯学習文化課

皆様、新たな年を迎えいかがお過ごしでしょうか。「新春に新たなスタート」とこの春には新庁舎が開庁いたします。そこで今回は、新年と新庁舎にかけて奈良時代の遷都について記します。

平城遷都が行われたのは、和銅三年（七一〇）春二月のことです。元明女帝ら一行の車駕は住み慣れた飛鳥の地を離れ、奈良盆地の北に向かいます。この時、女帝がその車駕を長屋原（天理市長柄付近）に停め、故郷を懐かしんで詠んだのが次の歌といわれています。

飛ぶ鳥の明日香の里を置きていなば君が辺りは見えずかもあらむ『万葉集』巻一－七八（明日香の里を後にして奈良の都へ行ってしまったら、あなたの家のあたりはもう見えないことだろうな、あなたにもう逢えないことだろうな）。

ここで車駕とありますが、車駕とは天子の輿のことで、車輪が付いた車ではなく、人が担いだ乗り物です。担いだ人たちは車持部と呼ばれる職能集団の人々です。また、新しい都「平城」の名は中国北方の遊牧民の拓跋族鮮卑が建てた北魏（四四一～五三四）の首都、平城城（山西省大同市）に由来する名で、日本オリジナルでなく、良き名として流用されたものです。

平城遷都完成に至る経緯は、次のようなスケジュールでした。文武天皇の慶雲四年（七〇七）に計画され、翌年の和銅元年二月には平城遷都が宣言され、新都の建設にあたる二つの組織、造宮省の卿（長官）と造京司の任命がありました。十二月には地鎮祭があり三年後に遷都となったのです。現代工法で建設された新庁舎も約四年の時間が必要でしたが、果たして三年で都ができたのでしょうか？実は未完成のままで遷都したようで、遷都翌年の七一一年の九月になっても「諸国から民を徴発したにもかかわらず、逃亡者が多く宮を囲む垣（土塀）も未完成で、兵器庫を守るために臨時の監視を兵にさせた」との記録も残されています。

現代と違って新都決定の条件は、中国から伝わった思想が重要視されました。和銅元年の遷都の詔には、「平城の地、四禽図に叶い、三山鎮を作し、亀筮並びに従う。宜しく都邑を建つべし。」

四禽は東西南北の守護神で、高松塚古墳の壁画で有名になった朱雀（南）、青龍（東）、白虎（西）、玄武（北）のことです。亀筮は亀の甲羅と筮竹（おみくじの棒のようなもの）を用いた占いです。

風水思想では、北に山を負い、南に平野が開け、東には水が流れ、西には大道が通っている土地が理想とされています。平城京では北の山は奈良山丘陵であり、南は大和三山が望めるほどの平野です。宮の東には春日山に水源のある佐保川があります。では、西の大道はどうでしょうか。実は西に大道はなく東に大和古道があります。新庁舎も北に日光連山、東に田川、南は開けた水田、そして東に国道四号、JR、新四号国道と想像をたくましくすると平城京と一致します。新庁舎も平城京クラスですが、面白いことにこの思想にぴったり一致する施設、実は「道の駅しもつけ」なのです。

さらに面白いことをもう二つ。一つは、四禽にはそれぞれ色があります。朱雀は赤、青龍は青、白虎は白、玄武は黒です。相撲の土俵の吊り屋根にもそれぞれの色の房があります。「赤房下」は向正面（南）となります。

もう一つ。お隣の茨城県筑波学園都市にも四神相応の思想があります。昭和に創られた新興科学都市にもかかわらず、学園都市に入る際の道路脇通称都市ゲート（高さ十五メートルの柱で道の両側に各三本の計六本）は方位ごとにこの四色で塗り分けられています。学園都市も北に筑波山があり相応の地なのでしょう。